

『金々先生後日夢 不物好持たが病』：翻刻と解題

園田，豊
九州大学学生

<https://doi.org/10.15017/16291>

出版情報：文献探究. 5, pp. 58-73, 1979-12-05. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

『金々先生 不物好持たが病』

—— 綱刻と解題 ——

園田 豊

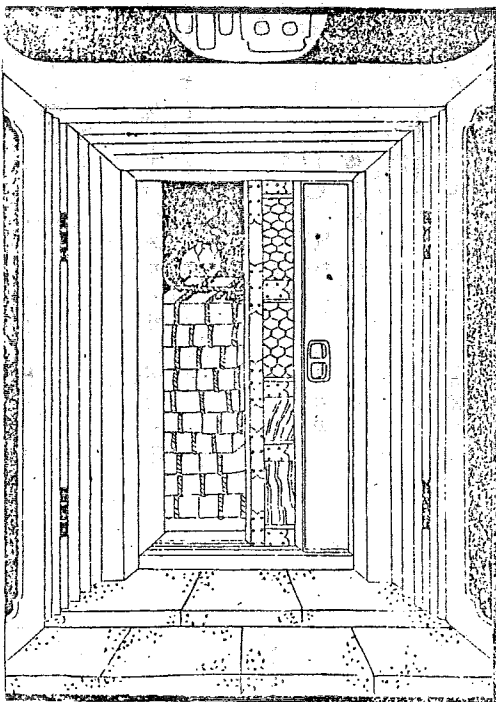
凡例

- 一、底本には長崎県平戸市松浦史料博物館蔵「金々先生 不物好持たが病 全」を用い、画、文字の不鮮明な部分は同館の国会図書館蔵「金銀先生再寝夢」でこれを補った。
- 二、本文の文字は現行の字体に統一し、かなについては、明らかに片かなの意識をもって書かれたと思われるものは底本どおりとし、その大小も底本どおりである。
- 三、誤刻と思われるものは横に(ママ)の記号を付け疑問の箇所を示した。

金々先生
後日夢
不物好持たが病 全

(表紙)

- 四、人物の詞には「」を付け、その人物を()で示した。
- 五、各丁数は、()でその文章の前に記した。



(一丁オ)

(二丁ウ)



うに全ぜん生まると
 ぶんわつをばらまら
 ろんたうんわがうやめ
 むち全のう元祖のまけ
 小ぢんのんそ南てまの
 全代その介かど徳度族の
 全代おびいしくはらいかふ
 わくくくくくくくく
 全代南てまの主人とさうと
 て我々一いせよとくくくく

(二丁オ)



全代南てまの主人とさうと
 て我々一いせよとくくくく
 全代南てまの主人とさうと
 て我々一いせよとくくくく
 全代南てまの主人とさうと
 て我々一いせよとくくくく
 全代南てまの主人とさうと
 て我々一いせよとくくくく

(二丁ウ)



全代南てまの主人とさうと
 て我々一いせよとくくくく
 全代南てまの主人とさうと
 て我々一いせよとくくくく
 全代南てまの主人とさうと
 て我々一いせよとくくくく
 全代南てまの主人とさうと
 て我々一いせよとくくくく

(三丁オ)



全代南てまの主人とさうと
 て我々一いせよとくくくく
 全代南てまの主人とさうと
 て我々一いせよとくくくく
 全代南てまの主人とさうと
 て我々一いせよとくくくく
 全代南てまの主人とさうと
 て我々一いせよとくくくく

(四丁オ)



世の門は
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ

世の門は

まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ



世の門は
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ

(三丁ウ)

(五丁オ)



世の門は
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ



世の門は
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ
まひれ

(四丁ウ)

(五丁ウ)



(六丁オ)



(六丁ウ)



(七丁オ)



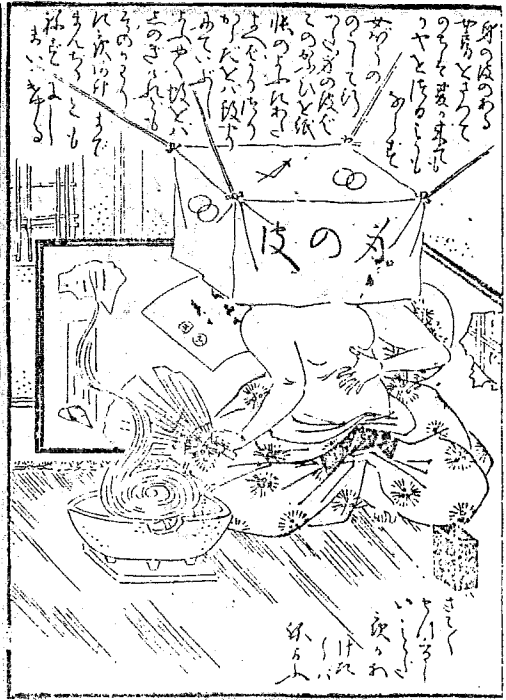
(七丁ウ)



(八丁オ)



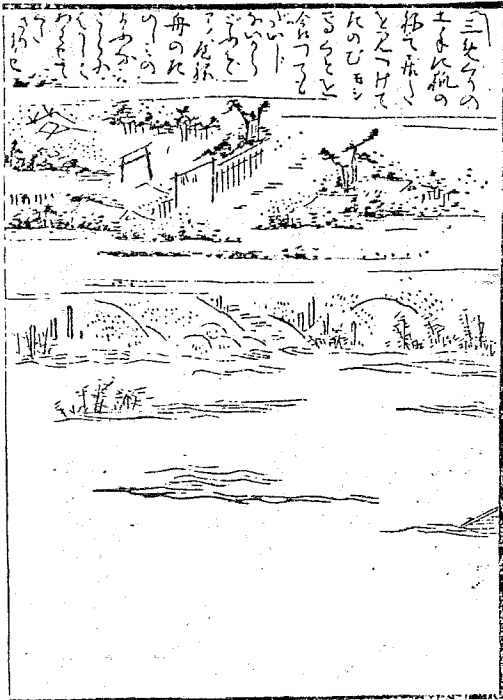
(八丁ウ)



(九丁オ)



(十丁オ)



(九丁ウ)

(十一丁オ)



(十丁フ)

(十一丁ウ)



(十二丁オ)

(十二丁ウ)



(十二丁オ)

(十三丁ウ)



(十四丁オ)



(十四丁ウ)



(十五丁オ)



(十五ウ)



(本文)

(一丁ウ・二丁オ)

こゝに金ぎん先生といふ人あり金銀はもちろん七ちん万ぼ
うくらにみち金のこし元銀のめかけ小ぼんのはんとう前りよ
うの手代その外なみ錢づく錢の家来おびたしくつかいなに
小そくなくくらしける

手代前りよう主人をなきものにして銭が一とい世にはびこ
らんとすいしや小玉銀とはかる

前録「ぜんたいはんとうの小ぼんが居てはおれがくうい
かまけるあいつをむさつはりしまいたい」

小玉銀「わたしはがさようげんにやるとあつちから身を引
ます」

金銀先生「ふにはばににおかされね入られる工ふうをする
金銀先生」
前句にねそびれた夜は千兩をつかつて見と
あれどもおらは千兩くらい小だん遺小から珍らしくないマ

ねられぬから金をありつかりすて見よふとおもふがどうだ
うう

女房「へこれはあたらしいおもひ付としく捨て見やし
やう」

(二丁ウ)

金を有ッきり西のうみへさらりつとすてろと云ひわたす

ぼんとう小ぼんいけんする

小判「これはお気がちがわれましたか古人も是をうるも
のは前にたし是を失ふものはしりへに立と申ました金のない
のは首のないにはおとりましたひらに此義は御無用に被成ま
せ

女房「へはてしやうしなほんにすてなざるのでははないだ
んながねそびれてなくさみに捨て見なざるのだもの小」

前録「はて貴様一人そふい小ことはいこれもだんなの
おなぐさみだ」

(三丁オ)

ぼんとう小ぼんいさめかねて引く

小判「式朱はやつことなり小ぼんはいさめて死すとはい
へど死気がないから三たびいさめて困ひざれば身しりをさま
しやうおしつけおほしめしあてられませ」

(三丁ウ・四丁オ)

ぼんとう小ぼん身しりをきしよりたれあつていさむるもの
もあらざれば金銀先生心のまゝに金を西のうみへ捨させる

手代前りようむまく主人をたばかりいさみすんで西のう
みへさらりくとすて

前録「捨るのはおしいよふたかこれがあつてはおうかか
た身がすばるよふた是からはおらが世になら小」

世間のねそびれたものゝ夢と此ところへ来かゝりおもひ
かけなく金をひらつてよろこぶ

男一「これは嬉しいはなても丁のさかりをほらつてあま
りでいきなやしやうをこしらへましやう」

男二「巻兩まさや二兩か米やあまりをほまわして刺をの

ばしましやう」

(四丁ウ)

金銀先生心のまゝに金をすて、しまければ家来を遣ふこと
もならず今は小うしかけむかいの身だいとなる

(女房)「へこうはたらくとかくべつおなかぶすきやばしし
かしおくらもの、いしきのすみにはこまりやす

(五丁オ)

(金銀先生)「へおもしろい、此ごろははたらく中へかめ
しがかくべつむまくわれぬめしをたくにはほうがあつた

へはじめどん、中らよろ、ぐつ、へに火を引て三尺
さつてざるねぶりおやか死ぬとも小たとなるなしかこ小い小
こつたつけ

(五丁ウ)

小うしかけむかいにて身なべもおもしろければも一日まし
に米むつさみしく今はさつほりなくなりければせんかたなく
たしなんでおいたる細身のわきざしをまけて米をとる

(女房)「へ、や、わきざしをまけてすつたら米になつた
のふしぎなことだの竹田の細工ではないか

(金銀先生)「へ、なんと細工は流く、しらげても玄米でもお
のぞみしたいサ

(六丁オ)

わきざしをまけて米は出けれどもまさがなくなりみそがな
くなりいかはせんと心をいためしか女房がたしなんでおい
たるくらの夜きを見だし、ちこうしてみそとまきにする

(金銀先生)「へ、ふひんながら主人のためたしんでくれう、
(夜着)「へ、くるしい、わたしがしんだらとうぞ水そうに
はされておかれしだいにして下さりませ

(女房)「おれが今まで命にかへてかくして置たものを小ひ
んや、その代りには八月、のつりせんくようはしてやろ
うによ

(六丁ウ)

わきざしをまけて夜きをころしてのちは外に才かくの仕かた

なくせひなく女ぼうの生皮をはぐ

(女房)「いかに小う小の申しやとてかわをほぐとはあんま
りとうよくじやアいたい、

(金銀先生)「へ、いたいと云小毛小としでもあるまいおしつ
けよくなるころへや、ちいさい時あかいるをはいたま、
また、「さか」てはぎにく

(七丁オ)

はさとつた女房の生皮をふるさかいにうつてやる

(金銀先生)「へよくその皮を見たがよいまだ登前トモでゑりあ
かもつかないことにはさたて、また血もかわかぬぢ、「だか」
んさてはなひ

(古着買)「へ、あのおかみさんの皮かへ、なんともう一度とて
ものことにおむぎなざりやせんか

へ女房生皮をはかれてあまりのくるしさにはいとまをもうい出
て行

(女房)「へ、かほしや風か赤身へしみてひりく、する」

(七丁ウ)

女房出て行一人くらしに有りければそれをもすむまいと
はりの八兵への仲人にて身の皮のたんとある女ぼうをよびけ
る

(金銀先生)「へ、はなすしほとふつてよいがあんまりとふり
すぎてさびがわるい

(八兵衛)「とかく二れからむつましくさつしやりませめて
たい

(八丁オ)

さかづきこともあひすみと二人に有りけるがまくらをか
すことはおもむむよらず女ぼうのはなの高きこそ道理持さん
せし身の皮をのころすと出しかけ竿のよふにはなへかけ大
さな尻にて、い主のねた上へどつさりすわり夜中ぐふともい
わせぬはさびよかりけるありさま也

へ金銀先生夜中女ぼうの尻にしかれてくるしさのまゝ、身の皮
はほしければもせひなくよく日さりこくりける

(ハ丁ウ)

身の皮のある女房をさつてのうほ夏か来ておかやをつるこ
ともならず女ほうののこして行つた身の皮はこのお小ひを紙
帳のよ小にあたまへばかりつりからだをば蚊ヤリにしていぶし
よ小やく蚊をばしのぎけれどもそのかわりに夜あけまでまん
ぢりとおねずにしまいける

(金銀先生)「さつて、せつくるしいことだ夜があけたらほ
ねよ小」

(九丁オ)

蚊にいちぢられてまんぢりとおねぬゆへいつそさかい丁へ行
て三ほんそうから見よふとなじみの茶やへしかけたところか
むかしの金のあつた時と違ひあつい茶も吞せずはなであいし
らわれて大それたり

(茶屋の男)「へたしかおなじみのよ小でもござりましたし
かしさレかゝつてはさじさはおろかさりおとしもござりやせ
ん人(「犬」か)晦日ころにはござりやしやう」

(九丁ウ)

しよせん芝居は見られず銭の入るたのしみはほうぬから野
へんのけしきを見てたのしよふと三めぐりの方へ心ざしける
に道すがら夢に金をひろつたやつら屋ねがへ(「ね」の)にまの
大さわざさくにつけてもむかし小ばんがいけんをさゝ入すに
金をすてたことを後悔すり(「る」の)

(ナ丁オ)

へ三めぐりの土手に狐のねて居たを見つけてたのむ
(金銀先生)「モシ馬くそを喰つておだいじないからどふぞ
アノ屋ね舟のたのしみのよ小なことにばかしてあわせてくだ
さりませ

(ナ丁ウ)

(狐)「そふれめんづくにたのみかけられてはどふもはかれ
にくいそして馬ぐそを喰ひなざるだけがむだといふものだから
う是から丁へ行っておこりませしやう此木の葉を見せると金だと
おもひますおまへのさん後はずけ笠と見へたししがニもは長

はをりと見へます」

(金銀先生)「へ馬ぐそを喰すに丁へ来て御どう道とはあり
がた、此御もんさつのに世にかわわすれんや」

(ナ丁オ)

三めぐりの狐につれられ中の丁の茶やへあかりこく小にさ
へる

(女)「へおれあはたがたは太かた松ばやでござりまじやう
(狐)「ちよつとさかほ松葉はい小すまんかいやだ玉屋にし
やしやう」

(金銀先生)「そんなにやつておよいかへしつて居ておとし
いよ小だ」

(ナ丁ウ)

それより小たり玉やへあがりあそびけるか野狐のかはしざ
のみつけぬ酒にぐつとさわされ正たいをあらわし命かうく
にける
(男)「へうぬ小る狐めふちころしてくすり喰いにしてくれ
よ小」

(ナ丁オ)

狐のにけたあとにては金銀先生の長ばをりもたちちちちちち
むしろとなりければ二いつもさだめて狐はるべし正たいをあ
らわざずは松葉いばしにしろと松の木へしりつける
(男)「へほんの金さへ出したならはゆるしまやうふつとめ
とはでめて一両それをださぬと松葉いばしたぞよ」

(金銀先生)「ごめん、わたくしは狐では御ざりませんつ
とめやはなほさつと金にしてますおしませしやうゆるしまくだざ
れ」

(ナ丁ウ)

むかしいけんを云つて用いられず身しりをさたる小はん折
ふし此里へ来かゝり古主のなんぎをよそはからすくいたくお
もひ崩りようにさいわい出合へ八片かりる
(雨鏡)「よんところないとあるから用立ますさつと明日御
返しなされい」

(小判)「へニれはかたしけな、則證文お渡し申すたしかにあ、いふはんざのあとほきつとむけん金のと云ふところだ、なんでもおくらしてしんぜましやう」

(ハッ)「あたまにまんざら老兩御されども、これはわたくしが命でござります」

(十三丁オ)

松葉いばしのなんざをのかれんと心をつくす折小レ二階ざしきの歌をき、小ばんがむかしのいけんをおもひぬし、いけんの金とくわんねんして手水はちをた、く、

(金銀先生)「へなんだかちう、おちるこれは夢かやうつ、なうはやくさめてくれろモウニリ、くとした」

(十三丁ウ)

南りよう小玉銀なを、あくじをみつだんする

(前録)「へまんまとはなでおかして金ほすてさせました、がモシ、此うへゆめがさめては老とのもくあみど小したものであろう」

(小玉銀)「それにはくつきやうのどくやく此あしかの黒やきをのませますと幾、たつても目、さめませぬさつそくそれをおのせなされ」

へ小ばん立き、をしてあくじをしる、サテ、あいつらがたくみでだんほをなんざせをるななんでもおもひしうせてくれん

(十四丁オ)

小ばんあうわれ出て南りやうを手ごめにせんとしけれど、も八片かりたる義理合にて手むかひならず又主人への忠義に、ずと腹をきる

(前録)「へ小ばん小つぶのねをたつておら、(二こ)るい、が世にはひころ小とい小おれがむほんださん念ならは八月を今かへせ、どふだ」

(小判)「小ばんをさつたりや八月となつた是を返すからはおんもひらもはいそかくごをひうけ」

(小玉銀)「ア、銀手はい」
(十四丁ウ・十五丁オ)

小ばんはらは切つたれどもすニしのさず中へ通用のざわりにもならず八月をかへして南りよう一るいをのこらずたばね引立来る

(小判)「へしばらく、みんな二いつらがあくじでござるおしになさるにはおよびませぬせんたい、これはお夢でござればす、ニしも早く目をさませませ」

(前録)「なむさんあたまがおちた」

(前録)「ア、かなわぬ、こうなつては百もん奴だ」

金銀先生はいけんの金にて南りよう八月をさづかりくるわのなんざをのがれ内へ久しぶりでかへつたところが大晦日しゃく金ニひは山のどくしよせん、これは叶わぬとくひをく、らんとするところへ小ばん南りよう一るいを一たばにして引立来り、悪じのわけを、あく、状させる

(金銀先生)「ア、テハ、前録が悪心であつたよな」

(借金請い)「かけをとうぬうち、にやめをさませられてはきがない」

(十五丁ウ)

金銀先生中めさめたる、ところ小レズや先生の夢にはあらず、作者と画工ニねませの金を、熱川はる町が、はるまつ晦日のやりくり、心に、をいためるうた、ねのし、はしの内の夢也、けり、それを、そのま、書して、まづ、はつ春のおぼぐ、さみに、めでたく、ほち、を、さうす、前巴

《書誌》

後日夢 不物好持たが病 全

中本一冊

(平戸市松浦史料博物館蔵)

装訂 改装。(他の賣表紙と合綴される。とじ糸は後のもの

表紙 原表紙。薄茶色。(一七・八×二・九センチ)

本文 匡郭内一五・四×一・〇センチ。
了教 全十五丁。

外題 原題簽、左肩。二重枠(一三・二×二・六センチ)。
「金、先生 不物好持たが病 全」とあり。

柱記 後日夢
「金、先生 不物好持たが病 全」とあり。

了付 柱の下部に「一(一五)」。
十五丁ウの「作者と画工こねませの金を恋川春町がは
るまつ晦日のやりくり」の文章により、恋川春町画
作か。

刊年 小説年表に記載なし。本文一丁オの蔵にネズミの画よ
り安永九庚子年出版か。

書肆 不明。

《解題》

「不物好持たが病」考

一、「金、先生 不物好持たが病」について

本書は平戸市松浦史料博物館の蔵書中「草紙下品類」に他
の黄表紙作品と合綴されている。綴じ糸は代えられているが、
表紙、題簽は原装本のものである。

表紙は薄茶色、普通の黄表紙のもの比べ、やや大きめで
ある。二重枠の題簽には「金、先生 不物好持たが病 全」と
あり、画外題の貼られていた痕跡はない。

柱記はなく、柱下部に「一(一五)」までの了教が記されて
いる。各丁(ページ)の大きさが揃っていることから刊行時
より一冊本であったと思われる。このことは題簽に「全」と
記されていることから明らかである。

表紙や題簽、十五丁が一冊にまとめられていることから本
書は袋入本であったと思われる。「樺史億説年代記」九丁オ
「袋入」の記述に「袋入本初まる。茶表紙に細き外題。紙袋入に
して青本とは別板なり」とあり、この装訂は本書のものとい

致することと傍証の一となる。但し、本書の袋は失われたら
しく木見である。

「金、先生 不物好持たが病」という書名は小説年表に記載
がない。が、本書の内容は国会図書館蔵「金銀先生再寝夢」
と同板であり、板木の摩滅などによる枠部の欠画(七丁ウ左
部、九丁オ右部など)が合致することから摺りの時期も、ほ
ぼ同じであったと思われる。

また、国会図書館本の表紙、題簽は元のものでは無い。従
つて、この「金銀先生再寝夢」の題は原題簽の失われた後に
小説年表類を参考とした後人の手によつて付されたとも考え
られる。

国書総目録には「金銀先生再寝夢」(三冊本)が竹清文庫
に存することが記されているが現在では散佚している。
ちりみに小説年表類を繰ると、「戯作外題鑑」には記載が
ないが、

① 金銀先生再寝夢 三 春町作 自書
(「増補青本年表」 明治39)

② 金々先生再寝夢 三 戀川春町作 自書
(「新修日本小説年表」 大正15)

③ 金銀先生再寝夢 三 恋川春町 自書
(「日本小説書目年表」 昭和4)

これらはいずれも「安永八年出版」の項にあり、加えて「金銀
先生再寝夢」という書名が小説年表類に現われたのは「増補
青本年表」が最初のものである。(これについては「刊年」に
ついての項で詳述する。)

「金銀先生再寝夢」の文章の翻印は「続帝国文庫黄表紙百
種及び「近代日本文学大系」12「黄表紙集」に収められている
が、この文章と国会図書館本、平戸本「不物好持たが病」の

文章(二)の二本が同板本であることは先に述べた(一)には少なからず異同が見られる。(注①)「黄表紙百種」の底本の所在は不明であるが、異版の存在する可能性も考えられる。

再び本書「不物好持」が病に度れば、本文中、主人公の名前が角書の「金々先生」ではなく「金銀先生」となっている。「金さん」と平仮名で表記されたのは一丁オの一箇所のみで、後は全て「金銀」と漢字を用いているので濁点の欠落とは思われない。「金々先生」の角書から想起されるのは「金々先生栄花夢」(安永四年)であろう。この売れ行きにあやかうと故意に、内容と異なる「金々先生」の角書と本書に付したとも考えられる。

元来袋入は官利を目的としていた。「江戸作者部類」に、少レ時代は下るが「天明中の事なり」として「色ずりの袋入にして三冊を一冊に合巻して、價或は五十六文六十四文にも賣けり」とある。普通は一冊が八文であつた由だから、袋入の値段は普通の二冊物、三冊物の二倍以上となる。天明元年の「菊舟草」にも「袋入にしてもよい位に青本とは有がたい」という記述があるので、この方法は安永年中にすでに用いられたと思われる。(注②)加えて「金々先生栄花夢」の後日譚という印象を与えていれば、売れ行きも増し、更に多くの利益が予想できる。恐らく本書の袋には「恋川春町作画」であることが明記されていたに違いない。十五丁ウにわざわざ一丁を割いて春町の自画像の描かれていたこと、春町作を強調する意図があつたのかも知れない。

しかし、内容的には本書は「栄花夢」の後日譚ではなく、筋立ては、小利、南録など当時使用されていた貨幣を擬人化して、その勢力争いを描き、その中に中の丁の茶屋遊びの様子も絡ませるといつた春町作のものでは「化物大江山」(安永五年)、「其返報怪吐」(安永五年)、「辞闘戦新根」(安永七年)、「腹京師食物合戦」(安永八年)などの異類合戦物の系列に属する作品だといえる。

二、刊年について

本書には刊年の記載はないが、これを袋入の常として特に珍しいことではない。

ただ、一丁オに描かれている、金蔵の千両箱の上に向うくまるネズミの画は、この作が子の年出版であることを示すものではないか。

春町の黄表紙処女作「金々先生栄花夢」が出版されたのが安永四年。一方、天明五年刊「莫切自根金生木」(唐未参和作・千代女画)中、萬々先生が蔵の金銀を海中へ捨てる件に「ちと小るけれどさんせん生のせんかくのと小りくらのさんせん」とのこらざりだしかいさうへすてさせる」とあるのは本書の三丁ウ「金銀先生心のまゝに金を西のうみへ捨させる」を下敷きにしていて、不物好持「病」の刊年は安永四年から天明五年の間の「子の年」ということになり、安永九年が、その年にあたる。

また、本文十五丁ウに「まづはつ春のおぼくさみにめてたはくちをさらず前已」とあることから正月の出版である。従つて、一丁オのネズミの画を出版年を示すものと見るなら、本書の刊行は安永九年正月となる。

前述したように小説年表類の中に「金銀先生再寝夢」の名が現われるのは「増補青年年表」が最初である。「増補青年年表」が参考としたのは「戯作外題鑑」(「照石十種三」所収)及び「青年年表」——この二書は異名同種という——「其他雑書」であるが(注③)、「戯作外題鑑」には「金銀先生再寝夢」の記載はない。

「増補青年年表」の編まれたのが明治三十九年。一方、「黄表紙百種」に「金銀先生再寝夢」の文章が刷印されたのが明治三十四年である。その校訂者の注記に「金々先生栄花夢大に行なわれしより五年目の春此再寝夢を出したれど(注④)栄花夢に比べては作意の巧み深くして大いに劣れり」と書いてあるのを「増補青年年表」が参考としたことは十分考えられる。「栄花夢大」に行なわれしより五年目の春」とは

安永九年であろうが、「栄花夢」が出版された安永四年を一年と数えて、五年目の春を安永八年とし、年表に加えたのではあるまいか。更に「金銀先生再寝夢」の題は「黄表紙百種」の校訂者が創出したものではないかという疑問も出てくる。本書の原題については暫くおくとし、刊年を前述した「黄表紙百種」の記述に従い安永九年とすれば、一丁オのネズミの画の意味する所も明らかとなるのであるが。

先に宮永啓子氏は天明二年刊「評史岡目八目」の春町について「近年袋入討おつとめゆへ青本では久しぶり」という記述を引用し、「春町は菊奔草に『恋川氏休まれて後は』とある通り天明元年には執筆を休んだのだから、少なくとも安永八・九年の二・三年間にはしつと袋入が出ていてもよいはずだと思われるのに、現在はずり袋入とわかつているのは『楠無益委記』一作のみならずない。ことを指摘しておられる。へ『恋川春町の黄表紙に於ける書誌学上の問題』『国文学』第十三号へお茶の水女子大学国語国文学会』昭和三十五年

この「不物好持たが病」が安永九年の出版であれば、「岡目八目」の記す春町袋入中の一冊に加えることができる。

三、作者・画工について

作者、画工名は明記されていない。

十五丁ウに「金銀先生ゆめさめたる」ところふしぎや先生の夢にはあらず作者と画工二ねまぜの金を恋川春町がはるまつ晦日のやりくりにとあることから作者・画工を恋川春町としてよいと思う。春町の画であることが確かな他の作品と比べても本書の画は春町のものであると知れる。

最終丁（十五丁）ウに描かれた欠伸をしている人物は春町の自画像であろう。坊主頭の髭である。（注⑤）

ちなみに、これと似た坊主頭の人物が朋誠堂喜三作「亀山人家妹」（天明七年）の二丁オに出てくる。

この人物の書き入れに「わたくしはちよつとおてつだいに

出ましたばかりしゆこうのかさねの外でござります」とあるのは天明六・七年に春町作の黄表紙が一作もないことを暗に指したのかもしれない。参考までに書き加えておく。

〔注〕

① 「金銀先生再寝夢」の国会図書館本と「黄表紙百種」の文章の異同は三十数箇所あり、その多くは「黄表紙百種」の翻刻或は翻印の際の誤であると思われる。また、「ことにはさたてまた血もかわかぬちんさてはなひ」（七丁ウ）や「まくらをかはずことはおもひもようず」（八丁オ）といった文章が、「黄表紙百種」に欠落しているのはその「編集の大意」に「第三に黄表紙は文中に忌憚るべき事柄多し」とあるが如く、校訂者が意識的に削除したものかもしれない。一方、国会図書館本にはない文章で「黄表紙百種」にあるものもある。

○（一丁ウ）あいつをもちさつほりしまいたい（彼奴をもちさつほり仕舞たいものだ）

○（五丁ウ）竹田の細工ではないか（竹田の細工では無ひか知らん）

○（二丁ウ）だんがねをびれてなくさみに捨て見なざるの心配せずともよいほね

○（六丁ウ）ちいさい時あかいるをほいたまふでたてはぎにくい（小さい時赤蛙の皮を剥だよりも餘ッ程ほぎにくい）

○（一）が「黄表紙百種」の文章

等がそれである。よつて「黄表紙百種」が底本とした「金銀先生再寝夢」の原本の存する可能性も考えられる。

② 浜田義一郎氏が「黄表紙おほえ書」（国語と国文学 昭36・四月号）で述べておられる。また、氏はその注（第一節米10）で「金銀先生再寝夢」にむ言及せられ「天明二年岡目八目に春町について『近年袋入ばかりおつとめゆへ

へ青本では又しぶり口とあるから袋入と思われれるが版元は未詳である」とされてゐる。

③ 「増補青本年表」の凡例に「一、参考本としては、専ら燕石十種中の『戲作外題鑑』に野崎城雄君所蔵の故殿名垣魯文翁の藏本『青本年表』を始め、其他雑書を以て之に充てたり」と又、「該二書（『戲作外題鑑』と『青本年表』）孰れも写本にて傳へられあるが、元來異名同種なれば」とある。

④ 但し、この根拠については「黄表紙百種」の校訂者は何ら記してゐない。

⑤ 先に春町は安永五年刊の「其返報怪談」に春町斎恋川と称する人物を登上させ、自画像らしきものを描いてゐる。この人物の頭は剃下げで坊主頭ではない。（森銑三氏が「黄表紙解題」で指摘しておられる。又、安永八年刊の洒落本「無頼通説法」で春町は「春町坊主遠大和尚」の筆名を使つてゐる。安永八、九年以降春町は坊主頭であつたと思われれる。